

東明寺蔵『大般若波羅蜜多經』の訓点について

宇都宮 啓 吾

一 はじめに

文字の歴史を考える上で訓点資料が重要であることは、大矢透博士の『仮名遣及仮名字体沿革史料』⁽¹⁾以降、諸先学によって成果が蓄積されていることから知られる。その中でも、同系法脈の中で特定の仮名字体が使用されることについては、春日政治博士の「片仮名の研究」⁽²⁾で仁和寺系統の円堂点資料に「一」(ス)の如き特定の片仮名字体⁽³⁾が使用されるといった指摘を初めとして、中田祝夫博士の『古点本の国語学的研究 総論篇』⁽³⁾や小林芳規博士の「平安初期訓点資料の類別―主に仮名字体による―」⁽⁴⁾、「平安時代中期訓点資料の仮名字体と訓読法」⁽⁵⁾、「十一世紀における片仮名字体の伝承」⁽⁶⁾などの訓点資料における仮名字体の変遷と訓法や系統との関連についての論や築島裕博士の『仮名』⁽⁷⁾、「平安時代における仮名字母の変遷について」⁽⁸⁾や「仮名声点の起源と発達」⁽⁹⁾等で様々な指摘が存する。

また、仮名字体のみならず、ヲコト点についても中田祝夫博士の『古点本の国語学的研究 総論篇』以降、その歴史的発達の解明という点から、ヲコト点の系統や分類が進められ、ヲコト点がいつの時代にどのような宗派・流派の中で使用されてきたのかといったことが解明されてきている。

こういった知見は古写本の素性を解明する上で重要な視点となり、単に国語学のみならず、国文学や書誌学、歴史学、仏教学等にも示唆を与えるものと考えられる。

その為、稿者自身、右の如き視点から片仮名字体やヲコト点の系統の問題を手懸かりとして、訓点資料や大般若経、一切経等の素性の検討を行なっている。⁽¹¹⁾

とは言え、訓点語の研究は、加点の背景にある法脈やその他の言語的環境に立脚した上で、その言語的特質等を明らかにするものであり、一方で、先述の如き素性の解明は特定法脈における言語の解明にも必要な分析と考えられ、訓点資料の分析に際しては、その言語的環境乃至は素性の解明と言語的特質の解明という二つが常に果たされるべきものと思われる。

そのような立場から、本稿では東明寺蔵『大般若経』の訓点について検討して行く。

飛鳥路東明寺には現存五百八十三帖（紙本墨書）の『大般若経』が伝存している。その書写・伝来の過程とその素性については、別稿において奥書や巻第五百七十八の訓点を手懸かりとして検討した。その主旨としては、次の如くである。⁽¹²⁾

- ・本『大般若経』は本来、東大寺東南院の如き三論宗周辺に一具として存在した。
- ・そこから鎌倉期においては大和国忍辱山円成寺の鎮守経となる。その背景には、忍辱山流の定豪・定親周辺が関与しているものと考えられる。
- ・室町時代には近江国信楽庄多羅尾郷平楽寺を経て現在の東明寺に伝来した。
- ・巻第五百七十八は朱点によるヲコト点に加点されており、東南院周辺の三論宗系統の訓読資料と予想される。

右においては本『大般若経』の素性を明らかにすることに主眼を置いていた為、その言語に関する問題については詳細を検討していない。

そこで、本稿においては、東明寺蔵『大般若経』の訓点について、その言語の実態を述べることとしたい。

二 巻第五百七十八における訓読の実態

まず、東明寺蔵『大般若経』において訓読されている巻第五百七十八について検討していく。

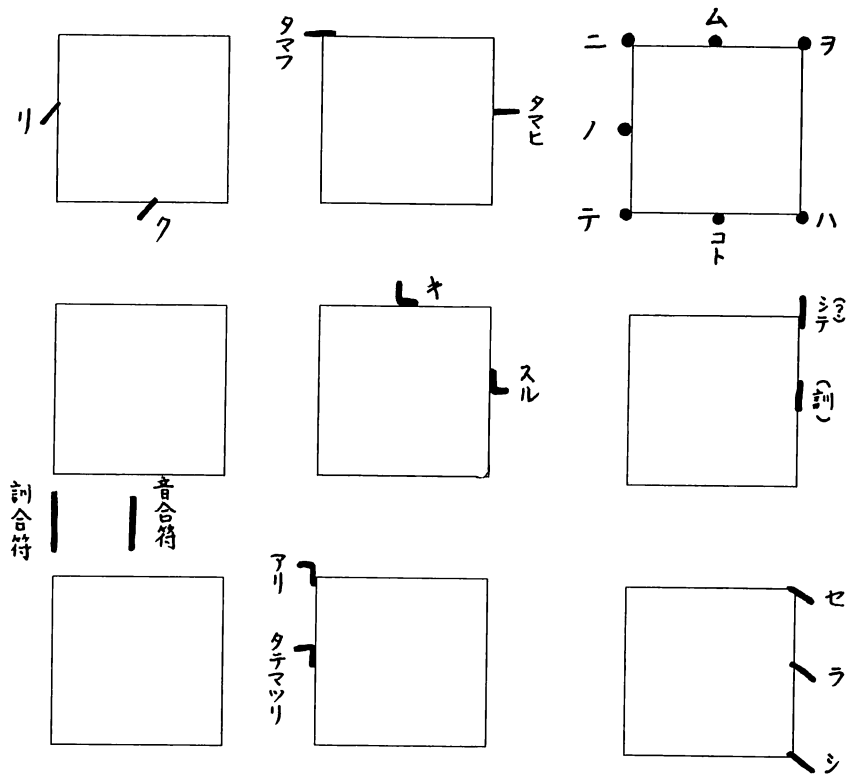
東明寺蔵『大般若波羅蜜多経』巻第五百七十八は、縦22・7cm、横9・1cmの折本装（もと卷子本で18紙・47折）の經典である。本文はその書風から九世紀後半頃の書写と考えられ、訓点は平安時代中期（十世紀頃）と覚しい白点の区切点、白点より若干時代は降るものの十一世紀後半頃の朱ヲコト点と仮名点、院政期から鎌倉時代後期にかけての数種の墨筆の字音点が存する。又、本書には奥書部分が改装の際に切断されており、書写・加点の具体的な事情を明らかにし難い面が存するが、忍辱山円成寺で加点されたと覚しい朱筆の区切点も存し、本書が当時忍辱山円成寺の鎮守経であったことが確認できる。（この点は後にも触れる。）

ここで対象とする訓点は、巻末三〇行程度と言語量としては少ないが、国語学上注目すべき十一世紀後半頃の朱ヲコト点と仮名点である。この朱点の仮名字体とヲコト点は次頁に示した。

本書は仮名付訓こそ多くないが、ヲコト点は詳密で、大体読み下し可能となる。また、片仮名字体の中に、「寸（ス）・「ム（ミ）」の如き古い仮名字体が存し、本書が十一世紀半ば頃の加点と考えてよいように思われる。⁽¹³⁾

そして、「寸（ス）・「ム（ミ）」の如き南都、とりわけ東大寺三論宗周辺において特徴的な字体の存在や、ヲコト点の系統も左下から右回りに四隅が「テニヲハ」となる第五群点に分類されながらヲコト点図に該当しないことなどから考えるに、本書の訓読が東大寺三論宗の僧の手になるものと予想される。⁽¹⁴⁾

では、このような素性に基づく本書の訓読の実態を検討するために、ここでは以下にその訓読文を提示することとしたい。



疊	ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
		ロ	ラ	ヤ	丁		ナ	タ		カ	ア
疊		キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
	人				ム	ヒ		チ	シ		ハ
有	給		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
			ル		ム			ス	ス	ク	ウ
事	奉	エ	レ		メ	ハ	ネ	テ	セ	ケ	エ
		レ	シ		メ					ケ	
時	シテ	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
					モ			ト			オ

〔訓読試案〕

▲是の如き神呪は三世の諸佛・皆共に宣一説(シ)て同(シ)く護念(シ)たまふ所なり・能く▲受持せむ者は一切の障滅(セ)む・心の所一欲に随(ヒ)て成辨(セ)不(ル)こと无かるへし・疾ク▲无上正等菩提を證してむ・爾の時に如來復(タ)神一呪を説(キ)たまふ

(陀羅尼部分 省略)

▲是の如き神呪は大威力を具して・能(ク)受持(セ)む者は業障消除(セ)む・所一▲聞の正法・総持して忘(レ)不・疾ク无上正等菩提を證(シ)てむ・爾の時に▲世尊 是の語を説(キ)たまふこと已(リ)て・金剛手菩薩等に告(ケ)て言たまふ・若(シ)諸の有▲情・「於」毎一日の旦に・心を至(シ)て是の如き般若波羅蜜多の・▲甚深理趣最勝法門を聴一誦すること・間斷无(カ)らむ者は・諸の惡業障・▲皆消滅すること得て諸の勝喜樂 常に現一在・前せむ・大樂金剛不空▲神呪を・現身に必(ス)一得む・究一竟(シ)テ一切如來の金剛秘▲密・最勝成一就一を成滿せむ・久カラ不(シ)て當に大一執金一剛及(ヒ)・如來の▲性を得(當)し・若(シ)情類有(リ)て多(ク)の佛の一所にて・衆の善一根を植(エ)久く大願を發(シ)たてまつら未(レ)は・此の般若波羅蜜多の・甚深理趣最勝法門に▲於て・聴聞し書寫し讀し誦し・供養し恭敬し思惟し脩習する(コト)▲能(ハ)不(三)要(カ)多(ク)の佛の所(ニ)て衆の善根を植(エ)久(ク)大願を發(シ)て・乃(チ)能(ク)此の甚深理▲趣最勝法門於て・下ルモ一句一字を聴一聞するに至らむ・況(ヤ)能く具足(シ)て・▲讀し誦し受持(セ)むヤ・若(シ)諸の有情 ▲八十殞伽沙等の俱胝那庵多の佛を讚歎したてまつりて・乃(チ)能(ク)具足して此の▲般若波羅蜜多の甚深理趣を聞(カ)む・若(シ)地の方所に此(ノ)▲經を流一らせは・一切の天人阿素洛等・皆 供養すること 佛の制多の・如くす應し・此(ノ)▲經を置(キ)て身或は手に在(ラ)シムルこと▲有(ラ)むをは・諸の天人等皆礼敬(ス)應し・若(シ)▲有(一)情(ノ)類 此

(ノ)經を受一持せは・多の俱胝劫に宿住智を得む・常に勤(メ)・▲精一進して諸の善法を脩せむ・惡魔外道稽一留すること能(ハ)不(四)大▲天王及ヒ餘の天衆・常に隨(ヒ)て擁一衛して未(タ)嘗(テ)暫一捨(セ)《未》・終に横一▲死し枉(ケ)て衰一患に遭(ハ)不(三)諸一佛菩薩常に共に護持(セ)むに・一切の時を令て▲善は増し惡は減(セ)《令》ニメ・諸佛の主に於て・願(ヒ)て往生(セ)む・乃(訓)菩提一に至(リ)惡趣に墮(チ)不(諸)の有(一)情(ノ)類・此(ノ)經を受持せは・定(メ)て无邊の勝利(ノ)▲功德を獲てむ・我モ今略して是の如き少分を説す・時に薄伽梵 是の經を説(キ)たまふこと▲已(リ)シカは・金剛手等の諸の大菩薩・及ヒ餘の天衆・佛の所一説を聞(キ)たまひて・▲皆大に歡喜し信受し奉行しき・

〔原文〕

▲如是神呪三世諸仏皆共宣説同所護念。能▲受持者一切障滅。随心所欲無不成辦。疾証▲无上正等菩提。爾時如來復説神呪

(陀羅尼部分 省略)

▲如是神呪具大威力。能受持者業障消除。所▲聞正法總持不忘。疾証無上正等菩提。爾時▲世尊説是呪已。告金剛手菩薩等言。若諸有▲情於每日旦。至心聽誦如是般若波羅蜜多▲甚深理趣最勝法門無間斷者。諸惡業障▲皆得消滅。諸勝喜樂常現在前。大樂金剛不空▲神呪現身必得。究竟成滿一切如來金剛秘▲密最勝成就。不久當得大執金剛及如來▲性。若有情類未多仏所植衆善根久發大願。▲於此般若波羅蜜多甚深理趣最勝法門。不▲能聽聞書寫誦誦供養恭敬思惟修習。要多▲仏所植衆善根久發大願。乃能於此甚深理▲趣最勝法門。下至聽聞一句一字。況能具足▲誦誦受持。若諸有情供養恭敬尊重讚歎▲八十殞伽沙等俱胝那庵多仏。乃能具足聞此▲般若波羅蜜多甚深理趣。若地方所流行此▲經。一切天人阿素洛等。皆心供養如仏制多。▲有置此經在身或手。諸天人等皆心礼敬。若

▲有情類受持此經。多俱胝劫。得宿住智常勤▲精進修諸善法。惡魔外道不能稽留。四大天▲王及餘天衆。常隨擁衛未曾暫捨。終不橫▲死狂遭衰患。諸仏菩薩常共護持。令一切時▲善增惡滅。於諸仏土隨願往生。乃至菩提不▲墮惡趣。諸有情類受持此經。定獲無辺勝利▲功德。我今略說如是少分。時薄伽梵說是經▲已。金剛手等諸大菩薩及餘天衆。聞仏所說▲皆大歡喜信受奉行

本書の訓読は、先述の如く、東南院の如き東大寺三論宗系統の訓読と予想される。

従来報告のある『大般若経』の加点資料の実態としては、築島裕博士によって次の如く指摘されている。⁽¹⁴⁾

・平安時代における大般若経は、大部分は本文の書写のみであって訓点を加えたものは希であり、又、その訓点には、訓読の注記と字音直読の注記とが存したが、訓読の注記には、恐らく興福寺の流れで赤穂珣照聖人などの訓説が専ら行われて、法相宗・真言宗などの間に伝承され、又、字音直読の点は、多分天台宗と法相宗とがあったが、後者は恐らく法相宗の真興の説が主として伝承され、

・これら諸本の加点について見ると、その多くは平安時代後半から起り、巻第一の巻首に載せる大唐三蔵聖教序の部分を訓読した例が多く、本文は大多数が字音点であること、訓読に関する識語に興福寺が見えること、訓点が圧倒的に多いことなどから、この経の訓読は法相宗興福寺などを中心として行はれたことなどを推定し得るであらう。

この点から、従来知られる『大般若経』の訓読は法相宗・真言宗の訓読を中心とし、本書の如き東大寺三論宗の僧による訓読の具体的な例は本書以外には公にされておらず、『大般若経』訓読史上において注目すべき資料であると考えられる。⁽¹⁵⁾

その意味で、本書の訓読は、その存在自体注目すべきものと思われる。

そこで、右の訓読文に基づいて、本書の訓法について以下に検討していくこととする。

三 巻第五百七十八の訓法

本書における訓読の言語量は先に述べた如く三〇行程度に過ぎず、量的には非常に少ないところではあるが、特徴的な訓読に注目することによってその実態を窺うことは可能となる。そこで、特徴的な訓法について以下に示し、具体的な検討を行っていく。

まずは、本書の訓読において、古い訓法を伝えるものと考えられる事象を指摘する。

〔者〕

「者」字の用法の中で人物を指す際に、本書では孰れも「人（ヒト）」訓が付されている。

- ・能く受持せむ者^人は一切の障 滅（セ）む・
- ・能（ク）受持（セ）む者^人は業障 消除（セ）む
- ・間斷无（カ）らむ者^人は・諸の悪業障・皆消滅すること得て

古訓点資料における「者」字の用法の中で人物を指す際には、「ヒト」と「モノ」との二様の訓法が存する。そのうち、「ヒト」訓は「モノ」訓に比してその素性は古く、その加点の素性が平安中期までの加点資料では「ヒト」訓が主として用いられ、平安時代中期以降の加点資料では「モノ」訓が使用されるという、訓読史上の変遷が指摘される訓法である。⁽¹⁶⁾ そのような訓読史上の指標の一つと考えられる「者」字の訓法に本書では「人」という訓、即ち、「ヒト」訓が用いられているということは、本書の訓読がその素性の上で平安時代中期以前の古訓法を伝えているこ

とを窺わせる。

〔於〕

本書には、「於」字を動詞にして「アリ」と訓読する例が存する。

・乃能(訓)(ク)此の甚深理趣最勝法門(反)於(反)て・下ルモ一句一字を聴聞するに至らむ・

・一切の時を令て善は増し悪は減(反)せ(反)《令》ニメ・諸佛の主(反)に於(反)て・願(反)に随(反)(ヒ)て往生(反)(セ)む・

右の如く、「於」字を動詞にして「アリ」と訓読する例は、大坪併治博士が龍光院蔵『妙法蓮華經』における「特殊な漢字の用法」として次の如き例を紹介されている。⁽¹⁷⁾

・我等今於(反)りて佛(反)に聞(反)きたまへて授(反)けたまふを聲聞に阿耨多羅三藐三菩提の記を (二二四・一三)

また、この「於」字を動詞にして「アリ」と訓読する例は、小林芳規博士が『玄奘法師表啓』とそれに共通する漢文を持つ『大慈恩寺三藏法師伝』永久点とを比較して「於」字の訓法が「ニ・ニシテ・ウヘニ・アリテ・オキテ」から「オイテ・ニシテ」へと固定化していくことを述べておられ、この点からも本書が古い訓法を有しているものと考えられる。⁽¹⁸⁾

〔和文語「トク」〕

事態の速やかなることを表現する副詞として、本書においては「トク」訓が以下の如く用いられている。

・疾ク(反)无上(反)正等菩提を證してむ

・疾ク(反)无上(反)正等菩提を證(反)(シ)てむ

事態の速やかなることを表現する際に、訓点資料と和文資料とは同義性に基づく表現選択において二項対立の関

係にあり、前者では「スミヤカニ」を用い、後者では「トク」を用いることが知られている。⁽¹⁹⁾このような二項対立は、平安時代中期以降の訓法が固定化していく中において見出されるものであり、その一方で平安時代中期以前の古い訓法を伝える訓点資料においては「トク」訓の如き所謂「和文特有語」が用いられる例の存することが指摘されている。⁽²⁰⁾

〔未〕

未然の意を表わす「未」字の訓法には、「未」字を打ち消しの助詞として訓ずるものと、再読形式「イマダ……ズ」と再読する場合とが存し、本書においては次の例の如く、両方の形式が存する。

・若(反)(シ)情類有(反)(リ)て多(反)(ク)の佛の(反)所(反)にて・衆の善(反)根を植(反)(エ)久く大願を發(反)(シ)たてまつら未(反)レは・

・四大天王及ヒ餘の天衆・常に随(反)(ヒ)て擁衛して未(反)(タ)嘗(反)(テ)暫(反)捨(反)(セ)《未》・

前者の訓法は訓読史上、古い訓法を伝える訓点資料において見出されるものであり、後者の訓法が後出の訓法とされる。⁽²¹⁾そして、本書の訓読はその両方が存していることが知られる。

以上のごとく、本書には訓読史上、古い訓法が存する。その一方で、次の如く、新しい訓法も存在する。

〔當〕

漢文訓読史上、相対立するA B二種の訓法がある場合に、或る種の資料群ではAの訓法を用いるに對して、残る他の資料群では対立するBの訓法を用いて峻別するという場合が存する。

いわゆる再読字の「當」字の訓読もそれに該当し、漢文訓読史上、「當」字を再読するか、再読せずに一訓に読む(単読)かは二者択一の訓法となっている。

本書における「當」字の訓法は、次の如く再読となっている。

・久カラ不(シ)て當に大―執金―剛及(ヒ)・如來の性を得(當)し・
 「當」字の単読は平安時代初期の訓点資料に特徴的であり、再読は平安時代中期以降の訓点資料に特徴的であるとされる。⁽²²⁾ このことから考えるならば、本書の訓法は平安時代中期以降の新しい訓法の反映と考えられる。

〔已〕

漢文訓読史上、完了の意を表わす「已」字の訓法には、単に助動詞の「ヌ」(ヌとその他の活用形)に訓ずる場合と、「ヲハル・ヲハ(リ)ヌ」と訓ずる場合とが存する。

本書においては、次の如く「ヲハル」と訓じている。

・爾の時に世尊 是の語を説(キ)たまふこと已(リ)て・金剛手菩薩等に告(ケ)て言たまふ・
 ・時に薄伽梵 是の經を説(キ)たまふこと已(リ)シカハ・

右の如き訓法は、平安時代中期以降の訓点資料において一般的に認められる訓法であり、本書の例もその新しい訓法の反映と考えられる。

〔及〕

並列の意を表わす助字「及」字の訓読としては、次の如き例が存する。

・四大天王及ヒ餘の天衆・常に隨(ヒ)て擁―衛して
 ・金剛手等の諸の大菩薩・及ヒ餘の天衆・佛の所―説を聞(キ)たまひて・

訓読史上、並立の意を表わす助字の「及」字の訓法としては「……ト……ト」と訓じて「及」字を不読とする場合

と、「及」と訓読する場合とが存する。

前者の訓法は訓読史上、古い訓法を伝える訓点資料において見出されるものであり、⁽²⁴⁾ 後者の訓法が後出の訓法である。そして、本書の訓読は新しい訓法によって訓読されていることが知られる。

〔令〕

使役の「令」字の訓法には、「令」の如く再読形式に訓ずるものと、再読形式にせず「……ヲシテ」を下の使役者を示す漢字に付す場合と、「……ヲシテ」を用いず「……ニ……セシム」または「……ヲ……セシム」と訓ずる場合とが存し、本書においては次の例の如く、「令」の如く再読形式で訓読している。

・一切の時を令て善は増し惡は減せ(令)ニメ・

後者の訓法は訓読史上、古い訓法を伝える訓点資料において見出されるものであり、⁽²⁵⁾ 前者の訓法が後出の訓法である。そして、本書の訓読は新しい訓法によって訓読されることが知られる。

以上の如く、本書においては、訓読史上、古い訓法と新しい訓法の両方が併存していることが知られる。このような特徴は、平安時代中期の訓読の実態に適合しており、片仮名字体やヲコト点等の表記面のみならず、訓読の面においても本書の加点が平安時代中期の特徴を有していることを窺わせる。

これらのことを踏まえた上で、その他、本書において注目される訓法を提示する。

〔應〕

・若(シ)地の方所に此(ノ)經を流―行せは・一切の天人阿素洛等・皆 供養すること 佛の制多の・如―くす
 應―し・

・手^アに在^ラシムルこと有^ニ(ラ)むをは・諸の天人等皆礼敬(ス)應^ルし。
 本書においては、漢籍訓読において特徴的とされる「應」字の再読「ヨロシク……ベシ」という形式ではなく、単独形式で「ベシ」と訓読している。

「敬語表現」

本書における敬語表現は、次の如く孰れも仏に対するものとなっている。

- ・世尊 是の語を説(キ)たまふこと已(リ)て・金剛手菩薩等に告(ケ)て言^タまふ。
- ・若(シ)情類有(リ)て多(ク)の佛の^キ所^トにて・衆の善^ニ根^ヲを植(エ)久^ク大願^ヲを發(シ)たてまつら未^レ。

・若(シ)諸の有情 八十殞伽沙等の俱那庵多の令佛を讚歎したてまつりて・乃(チ)能(ク)具足して此の般若波羅蜜多の甚深理趣を聞(カ)む。

・時に薄伽梵 是の令經を説(キ)たまふこと已(リ)シカは・金剛手等の諸の大菩薩・及ヒ餘の天衆・佛の所^ト令説を聞(キ)たまひて・皆大に歡喜し信受し奉行しき。

また、漢文訓読史上、平安時代中期以降に漢字の実詞訓は即字訓の行なわれる傾向の強いことが指摘されているが、右の二番目の例に見られる「佛の^キ所^ト」の例では、仏に対する敬語表現に引かれて「所」字の訓として即字訓の訓とは言い難い「モト」訓が用いられている。

以上、本書における特徴的な訓法について検討してきた。そして、本書の訓読が平安時代中期(十一世紀)の東大寺三論宗系統における『大般若經』訓読の実態として捉えるべきものと考えられる。

その点から、更に本經における実詞訓について見るならば、以下の如き例が挙げられる。

者^ノヒト 能く受持せむ者^ハ一切の障 滅(セ)む。
 疾^トトシ 疾ク无上正等菩提を證してむ。
 忘^ルワスル 所^ト聞の正法・總持して忘^レ不^シ。

○且^ニアシタ 若(シ)諸の有情・「於」^キ毎^ニ日^ノの且^ニに^シ。
 所^トモト 多(ク)の佛の^キ所^トにて。

於^テアリ 此の般若波羅蜜多の・甚深理趣最勝法門^ニに於^テ。
 要^ニカナラズ 要^ニ多(ク)の佛の^キ所^トにて。

植^ツウウ 衆の善根植^ツエ

久^クヒサシ 久(ク)大願を發(シ)て。

在^リアリ 身或は・手^ニに在^リシムルこと

勤^ムツトム 常に勤^ムメ・精^ヲ進^スして

能^クアタフ 惡魔外道稽留^スること能^ク(ハ)不^シ。

嘗^テカツテ 未(タ)嘗(テ)暫^ク捨(セ)《未》

終^ニツヒニ 終^ニに横^ニ死^スし

○枉^ケマゲ 枉^ケて衰^ニ患^ニに遭^フ(ハ)

至^リイタル 菩提^ニに至^リ。

墮^チオツ 惡^ニ趣^ニに墮^チ不^シ

(○)の付された例のみ、真興『大般若經音義』当該卷の和訓と一致

これらのうち、者（ヒト）・疾（トシ）・所（モト）・於（アリ）等の例はその当該和訓と漢字との対応関係において、定着度が高いとは言えず、更にこれらの和訓は興福寺法相宗系統の和訓を伝えるとされる真興『大般若経音義』の掲載和訓とも一致せず、和訓の点からも、本書の加点が興福寺法相宗系統とは性格を異にすることが窺われる。つまり、『大般若経』の訓読については、ヲコト点や訓法のみならず、和訓（実詞訓）においても系統による相違の存することが確認され、系統に基づく訓法の相違や和訓の相違の問題について更に検討する必要がある。

四 字音を巡る問題

前項までで、東明寺蔵『大般若経』に存する訓読の問題について検討してきた。次に、本経における字音の問題について述べることにしたい。

東明寺蔵『大般若経』のうち、その中核をなす平安時代後期書写本はその多く（三九〇巻）が朱区切点を有しており、これらは孰れも次ぎに示す奥書の如く、忍辱山円成寺に於いて興福寺四恩院本を以て校合・加点を行なったものであることが知られる。

- ・校了 四恩院之勝本区切并校了 忍辱山鎮守経（巻第九三）
- ・興福寺別院以四恩院於忍辱山交点了 英源（巻第二二二）

その加点時期については、巻第五五九の奥書と巻第二七七とを併せて見たとき、加点者である「堯藝」が共通することから「天福二年（一二三四）」頃であることが知られ、

- ・天福二年孟秋下旬之比重校了 堯藝
- 以四恩院勝本校了 忍辱山之榮実（巻第五五九）
- ・以興福寺別院四恩院勝本於忍辱山加校了 堯藝（巻第二二二）

そこに施されている字音点（片仮名）も字体表の如くであり、同時期の加点と見て良いように思われる。

本書における字音点の言語については、m・nの混同例の存在（「昏闇」・「闇蔽」^{フシヤム}・但し、概ね正用に適う）・語頭オ・ヲの混同例（「昏闇」^{フシヤム}・「闇蔽」^{フシヤム}）・連濁例「生橋」^{ケハシ}（去声濁）「挙故」^{キヤコ}などの言語的特徴が見出せ、これらはいずれも鎌倉

疊	ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	✓ レレ	ワ ウ ロ	ラ	ヤ	ア	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
疊	物	井	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
		井	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
有	給		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
			ル	ム	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
事	奉	エ	レ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	
		レ	レ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	
時	シテ	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
		ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

時代前半期頃までの言語事象を反映しており、字体と考え合わせることで本書の加点が奥書の「天福二年」頃のものであることが確認され、当時の大般若経読誦の実態を示す資料として重要であることが知られる。

さて、ここで注目すべき事は東明寺蔵『大般若経』の校合・加点に際して「四恩院勝本」を用いていることである。この「四恩院勝本」という記述は、本『大般若経』の他に興聖寺本、東大寺A本・長弓寺本等に見出され、特に興聖寺本は、当時の南都の学僧として著名な貞慶が所持していたものであり、「勝本」という記述からも「四恩院本」が当時に於ける興福寺系の証本として認められていたことが知られる。

この点については、当時の南都に於ける『大般若経』諸本の奥書の中で「勝本」とされるものとしては「四恩院本」の記述が多く、また重視されていることから首肯されるものと思われる。そのような良本として、校合・加点の範とされる「四恩院本」による加点と言うことになれば、そこに示された字音も当時の『大般若経』読誦における範たるもの一つと考えられる。

このような『大般若経』読誦における証本の存在については既に、川瀬一馬博士に指摘が存し、又、それを踏まえて沼本克明博士に次のような指摘が存する。⁽²⁸⁾

平安時代から鎌倉時代にかけて、既に赤尾本・四恩院本・妻室本等、証本とすべき価値が定まっていたとおぼしきものが存し、そしてそれ等が、興福寺に結びつくことと推定される事は興味ある点である。

又、証本と加点との実態については、稿者自身、別稿で安田八幡宮本と興聖寺本との加点の類似を次例に基づいて述べたことがある。⁽³⁰⁾

〈安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多經卷第四十五〉

・斷支斷節(ハ)徒(上)自動若誰荷(平)鳥跡(ハ)

陽(カ)焰(平)響(平)句義

〈興聖寺一切経蔵大般若波羅蜜多經卷第四十五〉

・斷支斷節(ハ)徒(上)自動若誰荷(平)鳥跡(ハ)

陽焰(平)響(平)句義

(加点箇所は全例一致・字音も一致)

この安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多經は加点時期が院政期から鎌倉時代中期とされるものであり、興聖寺一切経蔵本との直接の関係は見出し難いものの、加点の一致から同じ共通祖本を持つものと考えられる。その共通祖本がどのようなものであったかについては、興聖寺本では奥書に「春日御祖社本」と興福寺系統であることを窺わせるに留まるが、安田八幡宮本では次の如き奥書から、その素性を窺うことができる。

建保三年八月三日御社御本於安居房一校了 覚恩

この奥書によれば、安田八幡宮蔵本の奥書に、建保三年(一二二五)に春日社の一房と推定される安居院で覚恩が校合したことが知られる。そして、この校合者である覚恩は、興福寺真興との密接な繋がりが窺われ、⁽³²⁾そこから、「大般若経読誦」の実態として、「春日御祖社本」、即ち、興福寺真興の流れが興聖寺本や安田八幡宮本に伝わり、「大般若経読誦」の一つの範たる流れを形成していることが知られる。

その一方で、このような真興の流れを汲む「大般若経読誦」の実態と東明寺蔵『大般若経』の加点の実態とを比較した時、その加点箇所相違があり(東明寺本の方が加点箇所が多い)、又、次例の如く加点自体も異なる場合の存することが知られる。

〈東明寺藏大般若波羅蜜多經〉

- ・健行ケンギョウ（卷第三十六）
- ・超テウ越ゲツ（△）（卷第三十六）
- ・怨オン敵テキ（△）（卷第四十七）
- ・枯コ（平）竭ケツ（△）（卷第四十七）

〈安田八幡宮藏大般若波羅蜜多經卷第四十五〉

- ・健行ケンギョウ（卷第三十六）
- ・超テウ越ゲツ（△）（卷第三十六）
- ・怨敵オンテキ（入聲）（卷第四十七）
- ・枯コ（上）竭ケツ（△）（卷第四十七）

既に述べた如く、東明寺藏『大般若經』の加點の実態が証本たる四恩院本に基づくものである以上、場当たりの加點ではなく、証本に基づく加點であることから、「大般若經読誦」とその加點様式にも真興の流れとは別に興福寺四恩院本系統の流れの存することが改めて確認される。

四恩院は、『興福寺濫觴記』によれば以下の如く説明されている。

四恩院 御祈禱所

十三重塔。

順徳院御宇健保三年五月廿八日。覺連上人入滅。同十一月十日。門弟行蓮房建立。供養導師權別当法印範円。七僧在之。尊者五社垂跡。釈。葉。地。觀。文。尊像舍利殿在之。四院御寄進云々。於舍利者本来寺物也。建立已

後二百六十六年而。文明十二年十一月十九日夜炎上。於本尊者仏舍利以下奉取出。但本尊者唐院客。殿持仏堂有之。元要記曰。十三重塔婆白河院御建立也。

四恩院は興福寺との境界に存し、十三重の塔とそこに所藏されていた絵画資料に関する研究が従来知られてきたが、今回の指摘の如く、四恩院は大般若經の伝持とその読誦の拠点としての位置付けの予想されることが予想される。この点については、時期的には降るが、四恩院の住僧であった心性が『妙法蓮華經』を弘長三年（一二六三）から十数度に亘って開版していることが知られており、³³『大般若經』の流布と同様に、四恩院が經典（『妙法蓮華經』）の流布の拠点となっている点は興味深い。

また、四恩院本系統の証本については、東大寺A本の如く東大寺に伝来すること（長弓寺本も本来は東大寺A本と一具であった）、又、東明寺藏本も天福二年当時の忍辱山では東大寺長者となった忍辱山流の定豪・定親らが活躍した時期であり、その周辺で加點されていることは東大寺との関わりが窺われる。

こういった四恩院と東大寺との関わりについては、本書加點の天福二年より四十年ほど降る建治元年（一二七五）加點の東大寺図書館藏『華嚴經祖師伝』の奥書からも窺われる。

建治元年乙未夏之比自華之洛之西梅（マ）尾之中

高山寺恵月房弁清之許借寄此書之点本畢

点本殊為大切之間当卷者表詔興福住（マ）住侶

性現房成真令書写之蒙詔春日山麓四恩院

住呂願忍房覺玄令書写之即詔彼院家院主

如巴房朝海令付仮名并指姓畢此裏書仮名

并姓者土御門大納言入道頼定之所記録也

以彼禪門自筆之点本写之可為無雙之証本也而已

右の奥書によれば、東大寺尊勝院の宗性が『華嚴經祖師伝』を四恩院住侶願忍房覚玄に書写させ、「点本殊為大切」とされる訓点等を四恩院院主である如円房朝海に付けさせている点に注目できる。

このように、東大寺と四恩院との関わりは訓点資料の奥書においても見出され、また、既に述べた如く、四恩院自体が興福寺別院ながらも東大寺領との境界に存するなど、四恩院本の位置付けは、南都に於ける『大般若経』の流布やその読誦という視点から広く検討していくことが必要となる。

そのため、四恩院系統の「大般若経読誦」の実態がどのようなものであるのか、また、その源流が孰れの師であったのかといった問題については今後とも検討すべきものと思われるが、本稿では、ひとまず、四恩院本系統の『大般若経』が「大般若経読誦」の問題として重要であることを述べ、そこから振り返って、東明寺蔵『大般若経』の字音点の実態が

- ・四恩院本系統の字音として認められること
 - ・その言語量自体も多く、四恩院系統の「大般若経読誦」の資料として重要であること
- などについても指摘する。

五 おわりに

以上、本稿では東明寺『大般若経』の訓点について、字体や加点点様式からその素性を確認し、そこから国語学的な検討を行なった。

『大般若経』の問題については、宗派に基づく訓法の相違や和訓使用の相違の問題が存することを確認できるが、

その他、本稿で述べた如く、親本や校本といった本文の系統による加点点(字音読)の相違のあることが予想された。

その意味では、『大般若経』の加点点(訓読・音読)の問題を考えるためには、今後とも多角的な観点からの分析が必要になるものと思われる。

『大般若経』は奈良時代以降、盛んに書写・読誦・転読された經典であり、また、その宗派自体、南都古宗のみならず諸宗派に亘っているため、その加点点に関する研究は、漢文訓読史上、重要な課題と思われる。

そのため、稿者自身、『大般若経』の加点点の問題については、資料の発掘と個別的な分析、そして、体系的な把握という方向で進めていきたいと考える。

注

- (1) 大矢透『仮名遣及仮名字体沿革史料』明42
- (2) 春日政治「片仮名の研究」(『国語科学講座』昭9・7)
- (3) 中田祝夫「古点本の国語学的研究 総論篇」昭29(改訂版 昭54・11 勉誠社)
- (4) 小林芳規「平安初期訓点資料の類別―主に仮名字体による―」(『方言研究年報』13 昭45・11)
- (5) 小林芳規『国語と国文学』(昭49・4)
- (6) 『春日和男教授 語文論叢』(昭53・11)
- (7) 『日本語の世界5』(昭56 中央公論社)
- (8) 『訓点語と訓点資料』62(昭54・3)
- (9) 『金田一春彦博士古希記念論文集』1 国語学篇(昭58・12)
- (10) 拙稿「興聖寺一切経における訓点資料について―その伝来を巡って―」(『鎌倉時代語研究』第25輯 平12・10 武蔵野書院)
- (11) 拙稿「東明寺蔵『大般若波羅蜜多経』について―その素性を巡って―」(『南都仏教』第76 平12・8)

- (12) 小林芳規「十一世紀における片仮名字体の伝承」〔春日和男教授退官記念論文叢〕昭53・11 桜楓社
- (13) 拙稿「東明寺蔵『大般若波羅蜜多經』について―その素性を巡って―」〔南都仏教〕第76 平12・8
- (14) 築島裕「大般若經の古点本について」〔松村明教授古希記念国語研究論集〕昭61・10
- 築島裕「大般若波羅蜜多經の古本小考―奈良時代・平安時代の写経とその加點本について―」〔東洋文化研究所紀要〕第十一輯 財団法人無窮会 東洋文化研究所 平3・11
- (15) 滋賀県立琵琶湖文化館刊行の『大般若經の世界』(平7)には、小野神社蔵『大般若經』が写真掲載されており、それによれば、東大寺点(院政期加點)の加點されていることが確認される。小野神社の存する滋賀県小野は南都僧によって開發された「南都文化圏」であり、その地域にある『大般若經』に東大寺点が存することは東大寺との関わりを窺わせる。此書の訓読についても検討する必要がある。
- (16) 門前正彦「漢文訓読史上の一問題―ヒトよりモノへ―」『訓点語と訓点資料』第11
- (17) 大坪併治「訓点資料の研究」〔龍光院蔵妙法蓮華經古点について〕(風間書房 昭43・6)
- (18) 小林芳規『平安鎌倉時代における漢籍訓読の国語史的研究』序章 第四節「研究方法」(東京大学出版会 昭42・3)
- (19) 築島裕『平安時代に於る漢文訓読語に就きての研究』(東京大学出版会 昭39・3)
- (20) 小林芳規『角筆文献の国語学的研究』
- (21) 小林芳規『平安鎌倉時代における漢籍訓読の国語史的研究』序章 第四節「研究方法」(東京大学出版会 昭42・3)
- (22) 小林芳規『平安鎌倉時代における漢籍訓読の国語史的研究』序章 第四節「研究方法」(東京大学出版会 昭42・3)
- (23) 小林芳規『平安鎌倉時代における漢籍訓読の国語史的研究』序章 第四節「研究方法」(東京大学出版会 昭42・3)
- (24) 小林芳規『平安鎌倉時代における漢籍訓読の国語史的研究』序章 第四節「研究方法」(東京大学出版会 昭42・3)
- (25) 小林芳規『平安鎌倉時代における漢籍訓読の国語史的研究』序章 第四節「研究方法」(東京大学出版会 昭42・3)
- (26) 小林芳規『平安鎌倉時代における漢籍訓読の国語史的研究』序章 第四節「研究方法」(東京大学出版会 昭42・3)
- (27) 「大般若經訓読」に興福寺法相宗系統(真興の流れ)の存することについては、築島裕「大般若經の古点本について」〔松村明教授古希記念国語研究論集〕昭61・10)で指摘されている。
- (28) 『日本書誌学之研究』(昭18 講談社)

- (29) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』本論第一部第二章。
- (30) 拙稿「興聖寺一切經における訓点資料について―その素性を巡って―」〔鎌倉時代語研究〕23 平12・8 「大般若經」の項目
- (31) 東辻保和「安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多經の音注(資料)」〔訓点語と訓点資料〕44 昭46・6)
- (32) 東辻保和「安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多經に就きて」〔海南史学〕8 昭46・6)
- 沼本克明「[真音]と[和音]との関係―圖書寮本類聚名義抄による検討―」注15〔平安・鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究〕昭57・3 武蔵野書院)
- (33) 稲城信子「興福寺四恩院住僧・心性の法華經開版―中世南都の出版文化について―」(日野照正博士頌壽記念論文集『歴史と仏教の論集』平12・10)

国語文字史の研究 七

二〇〇三年一月十五日 初版第一刷発行 ©

編者 国語文字史研究会
代表 前田富祺

発行者 廣橋研三

発行所 和泉書院

〒543-0002 大阪市天王寺区上汐五丁目三十八
電話 〇六―六七七―一四六七
振替 〇〇九七〇―八―一五〇四三

印刷・製本／亜細亜印刷

ISBN 4-7576-0235-9 C3381